

●連載
都留重人自伝



いくつもの岐路を回顧して

第一九回

陸上競技部長は学長となるのが一橋大学の伝統

都留重人

(題字も)

田島直人氏

一橋大学陸上競技部長として十三年

私の肩書きもこの歳になるとかなり減っているが、九十歳になってまだ残っているのは、日本陸上競技連盟の審議員という役柄である。審議員というのは、「連盟の重要事項を審議し云々」と定義されているが、私は、あまりお役にたったことはなく、どうしてこの役を委嘱されることになったのか、判じかねていた。同じ地位には、南部忠平氏や沖田芳夫氏などかつての日本記録保持者がいたが、私自身、全国的な陸上競技の大会で入賞したのは、ただ一度だけ、一九二九年のインター・ハイで五千米六等という記録をもつにすぎないので、審議員の末席をけがすことにも、肩身の狭い思いをし

ていたのである。ところが、私は一九五九年に一橋大学陸上競技部の部長になってから十三年間その役をつとめたのだが、その間、先輩部員の尾本信平、吉見泰二等の方々が、連盟の財務を一手に引き受け、いかにも東京商科大学出身者にふさわしく、複式会計の方式を採用するなどして、東京オリンピック（一九六四年）のあとには一億円の剰余金を生み出す成果をあげ、連盟の財団法人化に成功したのだった。私は、その余沢に浴したのであったらしい。

どうして私が一橋大学で陸上競技部長になったかについては、理由がないわけではない。小学生のころから、私は陸上競技の記録や観戦に特別の興味をもっていたらしく、特に一九二四年の第八回オリンピックで、フィンランドのヌルミと

リトラが五千米で一、二位を占め（その時の記録は一分四秒三秒二）、日本からそれに出場したのが、後年外交官として活躍した岡崎勝男氏だったこと、また、その同じ年の千五百米日本記録（四分一九秒四）保持者が中学生の堀鉦一郎君であったことなど、今でも記憶に新しい。そして私は、一橋大学教授となつてからも、自宅が国立競技場に近かったこともあり、機会あるごとに、国公立大会などを見にいつていたが、一九五三年の五月、たまたま一橋大学生が百米と二百米で二位となり四百米リレーで三位になるのを目撃して意外な思いをし、その所感を、一九四九年に学長になられるまでは陸上競技部長の任にあられた中山伊知郎氏にお伝えしたのだ。その話が陸上部OBの方の耳にも入り、部長をしておられた山中篤太郎教授が学長になられたため部長職を退かれるにあたり、お鉢が私にまわってきたのである。

研究所教授故に学部学生諸君との接触がほとんどなかった私にとり、私の趣味でもあった陸上競技の舞台で部員諸君との親交を重ねることができたことは、若い世代から刺激を受ける願つてもない好機会であった。私自身にとり、大正末の堀鉦一郎君の千五百米の日本記録が、いつまでも破れない壁であったが、私が部長に就任してまもなく、部員の原田彰三君はそれを破ったし、また陸上部の大先輩水上達三氏が八百米で大正末に出した二分〇二秒〇という記録は、当時の日本記録に非常に近かったのに、部員の漆山浩一君が早くも破っていたから、私は、一橋大学陸上部員としては大正末日本記

録を目標とすることが丁度よい刺激になるのではないかと考え、各種目ごとにその目標を突破した部員に報奨の意味で銀盃を渡すこととし、これを「都留杯」と名付けて一九六四年からそれを発足させることとした。ところが、予想に反して言うべきか、部員諸君が「部長を破産させようぜ」という意気込みで健闘された結果なのであろうが、矢つぎ早に大正末日本記録は破られてゆき、私は嬉しい悲鳴をあげるばかりであった。結局、七米二四という織田幹雄さんの走幅跳の記録以外は全部破られてしまったので、目標の基準値は昭和十年末の記録に改めざるをえなくなったのである。

その織田さんが、水上先輩等の御尽力もあって一九六五年に、指導のため国立までこられるようになり、何回となく全種目にわたって懇切丁寧なアドバイスを部員一同が受けることができた。そしてその翌年には、田島直人さんに指導役をバトン・タッチされたのだったが、田島さんは一九二九年のインター・ハイで私の旧知であっただけでなく、私の家内の母方の郷里・長州岩国の出身でもあられたから、殊のほかの親しみをもって鎌倉のお宅から国立まで、毎週一度の来校を欠かされなかった。部員一同に深い感銘を与えたのは、田島さんが記された次の文章である。「私は四十年の経験を残らずここではきだしてみようと思つてゐる。オリンピック選手が出るかどうかはわからない。そんなことはどうでもよい。今、日本にわずかししか残つていない純粋なアマチュア・スポーツの土壌を大事に育てたいのである。」(ATHLETIC

FREUND, 1966)

そのおかげでもあったのであろうか、一九五二年以来惨敗を続けていた対東大戦に、一橋大学は六六年に、一点差で凱歌を奏したのだった。勝を決めたのは、最終種目の八百米リレーだったが、アンカーの水野晴夫君が東京オリンピックのヘイズもどきにバトンを空高く投げたとき、私のとなり立っておられた田島さんは、こぶしを握りしめて喜びを表現されたのである。先輩の方々も、この対東大戦での勝利が「悲願だった」ということから、「その褒美に君たちが卒業する前に沖縄へ合宿に行かせる」と伝えたのだったが、本土復帰前の沖縄旅行は貴重な体験だったに違いない。

子供に恵まれていない私も夫妻にとり、陸上競技部々員諸君との日常的懇親は天与の機縁であったことでもあり、年末の忘年会には、五十名ほどいた部員全部をわが家に招き、「司」店主の矢島君の出張で寿司をにぎってもらうもてなしをした。狭い庭でクロッケイや輪投げなどをし、最後には蜜声を張り上げて部歌を合唱したりしたから、さぞ近所迷惑のことではなかったかと思う。また夏の八月には、追分の私どもの別荘小屋で、部員十五名ほどが、毎年一週間ほどの自炊合宿を楽しんだ。「飛ぶ鳥は、あとをにこさず」と黒板に大書し、帰りぎわ清掃にも全く手ぬかりのない配慮には、正子も感心したものである。

その後、対東大戦には二度続けて（六八年と六九年）勝ったし、伝統のある「三商大戦」（神戸、大阪と東京）にも三

度（六六年、六九年と七二年）優勝するなど、一橋大学学内でも陸上競技部は多少鼻を高くすることができた。ところが予想外にも一九七二年の春、私は学長に選挙されてしまった。高瀬・中山両教授以来、陸上競技部長をしていると学長になるという「伝統」のおかげだったのか、私の場合も前例どおりとなり、私は、学長就任と同時に部長はやめることとなった。しかし、懇親を重ねていた部員諸君は、三十年後の今日まで、毎年晩秋のころには私たち夫妻を招いての宴を催してくれており、昨年はそんな機会に、「司」店主の矢島君もよんでくれた。やはり陸上競技部の諸君は、私たち夫妻の「子宝」代役と言えたのである。